

森づくりに励む 大石 住夫さん(61)

好きなことと山仕事

in my life

団塊第2章

10

面で樹齢20年以上のスギやヒノキを伐採する。バランスを崩すと、谷底に転げ落ちてしまいそうだ。

亀山市野村1丁目の大石住夫さん(61)は、60歳で定年退職してから、森づくりに精力を注いでいる。

今、鈴鹿森林組合の委託を受け、鈴鹿市の小岐須溪谷の間伐などを手がける。自らも入っているNPO「森林の風」のメンバーは30〜70代の8人と汗を流す。ここに通っ

て、もう9カ月になる。

「定年延長で働くこともできたんだけど、スバッと辞めよう、好きなことをしよう、と思ってる」

島根県江津市出身。地元の工業高校の機械科を出て、電子部品大手の日東電工に就職。以来42年間、絶縁材料を研究する部署などで勤め上げた。

若いころからアウトドア派だった。「結婚までに日本の3千以上の山に登り切る」と

いう目標を立てて、28歳で達成。その年、兄に紹介してもらった北九州市出身の恵美子さん(61)と結婚した。

「頂上まで登り詰めた達成感と言うんでしょうか。あの

見晴らしは、何にも例えようがありません。自然への愛着の深さは、四方を山に囲まれたところで育った故郷の影響があるのかもしれない。

退職後、いなべ市の棚田保全の手伝いをしていた時、森林の風のメンバーから「山の整備もしてみませんか」と声をかけられた。森林の風が主催する「まちのきこり人育成講座」に通い、チェーンソーの使い方や間伐、枝打ちの仕

方など、山仕事を一から学んだ。

山登りのベテランも、森が荒れているを意識したことにはなかったという。

「植林されたスギ、ヒノキは間伐されずに密生していて、ひ弱です。立ち枯れた木や、倒れていたりする木も多いんです」

モットーは「誠実」。時に零下にもなる冬も、森に入る。退職後、家族の健康を願って33日間で四国霊場八十八カ所を一人で歩き通した体力が、気持ちを支える。山にも誠実に向き合つことを忘れない。

(聞き手・佐野登)



荒れた人工林の整備に励む大石住夫さん(鈴鹿市小岐須町)

長女・優子さん(31)



長女の関川優子さん(31)が高校を卒業する時は、「就職氷河期」だった。父から「女の子は就職が難しい。手に職をつけるのが一番」とアドバイスされ、歯科衛生士をめざして四日市市内の専門学校で学び、歯科医院に就職した。「おかげで就職であまり苦労はしませんでした」だが、小学生からの夢はあきらめ

子との時間大切に

た。「保健室の先生になったかったですよ。やさしい女性の先生で、よく保健室へ行っていました」。そのための勉強ができる短大への進学も考えたという。

歯科医院に勤め始めてから友人の紹介で知り合った同い年の会社員と、22歳で結婚。小学2年の長男、5歳の長女の母だ。

書店でパート勤めをしながら、子育てに集中する。「子どもが帰ってくる時間には、家にいてあげたい」。自分もそうだったように、子どもとの時間を大切にすることが、「目標を持って自立する子になってほしい」

父の思い出

1985年の「つくば万博」「つくば」からディズニーランドへも行きましたね。子どもは2人とも小学生でしたが、子どもをあちこちへ連れて行くので、近所でも有名でした」(住夫)

「つくば万博よりも、私の思い出は、毎週土曜日に開いていた『反省会』です。兄と私、そして親も、その週の反省と来週の課題を発表するんです。学校のテストやスイミングスクールの

の昇級試験のことなんかを話して、『がんばりまーす』とか言っていましたね。この後のトランプゲームが楽しかった。ノートに点数もつけていたんですよ」(優子)